

通信制大学院の設置について

外国語学部長
外国語学部長

清水 克正

本学は、今年6月に通信制大学院外国語学専攻(修士課程・入学定員40名)の設置申請を文部省に行なった。通信制大学院は、平成10年3月の大学院設置基準の改正により可能となり、地理的・時間的制約を超えて、広く大学院教育を社会人に開放しようとするものである。従来、大学院での研究・教育は、通学制を中心にしていたが、最近の情報・通信技術の進展を踏まえ、大学院の設置基準が改正されたものである。こうした分野で先進国である米国では、part-time university、distance learningが言われ、インターネットなどを用い、在宅学習を中心に高度専門教育が実施され、学位の取得も可能になっている。

本学は、開学以来、さまざまなレベルで地域との連携を深めており、特に、平成3年の「設置基準の大綱化」以降、学内での組織・制度の改革の中で「社会に開かれた大学」および「生涯教育」への取り組みを重視しており、社会の多様な要望に応えようとしている。今までに、それぞれの学内機関を通して各種講演会、セミナーなどを開催し、また大学院は昼夜開講制により社会人に専門教育を実施している。通信制大学院は、こうした社会と連携する教育・研究の延長線上にあるものであり、変革する社会の中で強い学習意欲を持つ社会人に大学院での研究・教育の機会を提供するものである。ただ、通信制大学院は、通学制と基本的に異なる。自宅での学習とスクーリング(面接授業)を中心とし、自学自習を原則としている。このため、多くの研究分野での教育が可能というのではなく、当然のことながら理工学系のように実験を中心とする分野では実施が難しい。つまり、通信制により十分その研究・教育の成果を上げることが可能であることが重要であり、現在、通信制大学院で開設されている研究科は、主に文学、社会学、教育学および情報学などであり、文献による研究と資料調査の研究などが中心となる分野が多い。英語学専攻は、文献研究と資料調査を中心にかかり教育効果を上げることが可能であり、音声・映像を伴うものはビデオ、CD-ROMなどを用いて指導し、さらにスクーリングを実施することにより十分対応できるものと考えている。

情報・通信技術の進展により、今後こうした教育形態は増加する傾向が考えられ、既存の教育方法にも大きな影響を及ぼすことが考えられる。現在、学部の一部の授業ではインターネットが補助的に使用され、今後、遠隔授業なども取り入れられれば、通信制と通学制の壁は低くなることが予想される。社会が急速に変革し、教育のポータルレス化が進展している今、本大学院の試みはこれからの教育を考える上で大きなインパクトを与えるものと考えられる。本学にとって、通信制大学院の実施は初めてであり、現在、開設のための準備を鋭意進めているが、関係各位のご協力を切に要望している。

キャンパスは美術館

彫刻設置計画をめぐって

愛知県立芸術大学教員

小池 郁男



名古屋学院大学構内への彫刻作品設置計画のため大学を訪れたのは1998年の夏。暑い日であった。上古野文産点を左に折れ、まもなく急な坂道となるがこれを二気に上りきると左手に鉄骨で構成された軽快な門構と、その奥に続く校舎木とがトンネル状に一体化して見える正門が目についた。起伏に富んだ大学のキャンパスは、その建物や植栽によって統一感ある快適な空間として構成されていることに大変驚いたものである。この素晴らしい空間にどのような作品を設置すべきか、至大彫刻専攻6名のスタッフは半年以上にわたり検討した。

まず、作品を設置する空間を3つのゾーンに分け(図面参照)、それぞれの環境と空間設備について検討した。

Aゾーンは東門から希望館に至る独立した空間で、しかも360度校界が良好、大学を象徴するモノUMENTを設置する空間としては最もふさわしい場所と認識し、このゾーンを第一候補とした。

Bゾーンは正面玄関から表校苑までの空間。大学全体を構成する上で最も重要な位置である。建物と植栽のバランスが良く、多様なイベントなども開かれ、研究から休息まで大学の活動はこの空間を介して行われている。したがって、人と人との交流の場と位置付け、友好の空間とした。

Cゾーンは幽玄池から六合館南斜面とテラスの北側に至る遊歩道を利用した空間。ここは緑と水に恵まれた静かな場所であるが、池付近を除き植栽が多いため、風などを利用した軽量の作品に適すると考えられる。ここは、個人、グループなどのパフォーマンスができる空間を想定し、遊歩道の空間とした。

さて、昨年12月、希望館前に設置させていた作品「未来」に向けての主旨や制作経緯などを説明したい。この「遊歩道の空間」へはスタッフから幾つものアイデアスケッチが出され、全員で検討を重ねた結果、最もこの空間に適合するとして、「未来」に向けて、最終候補となった。

この作品は「△」という万物の構成要素と考えられる単純な形も(遊歩道の空間)を意識しながら構成し、この学び舎から未来に向けて飛翔する若者の気迫に満ちた心情を大学の建物のフォルムに適合させながらシンボリックに造形化してみた。

三個の脚で支えられた空中に浮かぶ中心の石は、外側を幾つ三角形で構成したメンブレスのフォルムによって不安定さが打ち消され、むしろ全体的に軽やかで、明るい感じが表現できたと思ふ。石は白黒の陰影石を使用し、白黒も含め落ち着いた色調の色調に心がけた。心に残る作品となれば幸いである。